神田外語大学大学院紀要　言語科学研究　第22号（2016）【研究論文】pp. 1-23

分詞構文の条件解釈についての覚え書き *

遠藤　喜雄
溝口　裕子

要旨

本稿は、英語の分詞構文が条件に解釈される事例を考察する。特に、意味論の問題とされていた分詞構文の解釈を統語的な観点から捉え直す可能性を探る。具体的には、日本語の条件文の特質を考慮に入れながら、英語の文の統語構造に条件の階層を想定し、Endo and Haegeman（2015, 2016a, b）の副詞節の分析を分詞構文に適用する可能性を模索する。結論としては、分詞構文が条件に解釈されることが妨げられる理由を相対最小性の原理（relativized minimality）に求める。

キーワード　free adjunct、条件解釈、relativized minimality

0．序

本稿では、条件に解釈される英語の分詞構文を考察する。特に、従来の研究において意味的な問題とされてきた分詞構文の解釈を、統語的な観点から捉え直す可能性を探る。具体的には、日本語の条件文の特質を考慮に入れながら、英語でも条件の解釈に関わる統語的な階層を想定し、Endo and Haegeman（2015, 2016a, b）の分析を分詞構文に適用する可能性を模索する。そこでは、分詞構文が条件に解釈されることを妨げる理由を相対最小性の原理（relativized minimality）に求める。

本稿は次のように構成されている。まず、Stump（1985）による英語の分詞構文の意味的な分析を見る。次に、Stumpの分析に異を唱えるHigginbotham and Ramchand（1997）の分析を見ながら、分詞構文の条件解釈に働く統語的な要因を見る。これらの先行研究点を念頭に置いて、野田（1989）が提案する日本語の条件文の特質を援用しながら、英語に条件の統語的な階層を想定する。そして、英語の分詞構文が条件に解釈されることが阻止される理由を相

対最小性の原理に求める。最後に、まとめと今後の展望を述べる。

１．先行研究

1.1. Stump（1985）

Stump（1985）は、分詞構文が条件に解釈できるか否かを、意味論の観点から論じた。具体例を見よう。

（1）a. Wearing the disguise, Bill would fool everyone.
　　b. Being the master of disguise, Bill would fool everyone.

（1a）の文では、分詞構文のwearing the disguiseが一時的（stage-level）な意味を持ち、条件として解釈されている。一方、（1b）では、分詞構文のbeing the master of disguiseが恒常的（individual-level）な意味を持ち、理由として解釈されている。これらの事実は、Stumpにより、次のように説明されている。まず、（1a）では、一時的な意味を表すwearing the disguiseが、would の表す総称の意味を限定する働きを持つ。つまり、「変装をする」という限定された状況のもとで、would の表す推量の意味が（1a）においては成り立つとStumpは主張する。これが伝統文法での条件の解釈に相当する。一方、（1b）では、恒常的な意味を表すbeing the master of disguiseは、wouldの意味を限定する働きを持たずに、主節から独立してその内容が常に真になる。この２つの内容が意味的な推論により理由の関係で結びつけられる場合、それが伝統文法の理由の解釈に相当する。（伝統文法の分詞構文の分析については、Curme（1931）、Kruisinga（1932）、Jespersen（1940）等を参照のこと。また、一時的述語と恒常的述語の区別については、Carlson（1977）やKratzer（1995）を参照のこと。）[1]

1. 2. Higginbotham and Ramchand（1997）

Higginbotham and Ramchand（1997）は、次に見る反例を提示して、Stumpの分析に異を唱えた。例えば、（2a）の文では、分詞構文having a lot of money in the bankが一時的な性質を表わすが、そこでは条件解釈が不可能となっている。また、（2b）の文においては、分詞構文being sickが一時的な述語を持つが、

条件としては解釈されることはない。条件として解釈するためには、beingを省略しなければならないとHigginbotham and Ramchandは主張している。[2]

（2）a. Having a lot of money in the bank, John could enjoy vacation.
　　b. （*Being）sick, John couldn't play.[3]

また、Higginbotham and Ramchandは統語的な要因が分詞構文の条件解釈には働いていることを、以下の例によって示唆している。（3a）では、理由を表す分詞構文having unusually long armsが文末に生じており、分詞構文と主文がコンマイントネーション（↘）により区切られる。一方、（3b）では、条件に解釈される分詞のstanding on a chairが文末に生じ、主文と分詞構文はコンマイントネーションで区切られることはない。この事実を基にして、Higginbotham and Ramchandは、条件に解釈される分詞は、主文と共に一つの文を構成し、分詞が単一の文の文末から文頭に移動して派生されるとした。一方、理由を表す分詞は、主文とは統語的に独立した別の文であると主張されている。

（3）a. John could touch the ceiling ↘having unusually long arms.
　　b. John can touch the ceiling, standing on a chair.

本稿で採用するカートグラフィー（the cartography of syntactic structures）の枠組みでは、上の事実は、次のように捉えることができる。文には、条件のための階層があり、そこに生じる分詞は条件として解釈される。一方、文には、理由のためだけの階層はなく、理由の解釈はStumpの述べる意味的な推論から導き出される。このように考える根拠は、以下の通りである。カートグラフィー研究では、ある階層が想定される際に、その主要部に専用の形態素があることが求められる。英語には、条件の階層の主要部として実現される形態素はないが、次節で見るように、日本語には、条件を表す形態素がある。この事実は、Chomsky（2001:2）の統一性原理（Uniformity Principle）により、日本語と同様に英語にも、日本語と同様に条件の階層があると考える根拠となる。

（4）統一性原理（Uniformity Principle）

In the absence of compelling evidence to the contrary, assume language to be uniform, with variety restricted to easily detectable properties of utterances.

２．日本語の条件文：野田（1989）を中心に

本節では、日本語の文に条件の階層があり、その主要部が明示的な形態素で占められることを見る。その前に、日本語における分詞とは何かを明らかにしよう。本稿では、Tsujimura（1992a, b）にしたがって、述語に「に」形を持つ場合、それが英語の不定詞に対応し、述語に「て」形を持つ形式を英語の分詞に対応すると考える。この考えは、以下に見るように、不定詞は一般に未来志向の解釈を持つが、分詞はそれを持たないという英語の分詞の性質に対応している。

（5）a. 手紙を出し<u>に</u>行く。（=不定詞）
b. 手紙を出し<u>て</u>来た。（＝分詞）
c. I remember <u>to</u> post a letter.（＝不定詞）
d. I remember post<u>ing</u> a letter.（＝分詞）

次に、日本語の分詞構文の先行研究を見よう。（6a）に見るように、日本語の分詞に「は」がつくと条件の解釈がなされるのだが、この点を議論した最も古い研究として、富士谷成章の脚結抄（あゆいしょう）がある。例えば、富士谷は、主題の助詞「は」が、7世紀以降に条件の副詞節の主要部である「ば」に転用した点を記述している。（詳しくは、富士谷（1977）、中田・竹岡（1960）、竹岡正夫（1961）等を参照）この点を議論した比較的最近の研究としては、Brockett（1991）がある。そこでは、（6b）に見るように「ては」の縮約形「ちゃ」が条件を表す事例として論じられている。

（6）a. 雨に振られては困る。
b. 雨に振られちゃ困る。

Brockettが指摘するように、日本語の条件解釈の分詞は、全ての点で英語の分詞構文と同じ特質を持つわけではない。例えば、日本語の分詞構文では、後件の文に否定語や否定的な意味が生じることが求められるが、英語にはそのような制約がない。その具体例として（7c）を見よう。そこでは、後件が肯定的な内容の場合に文法性が落ちるのに対し、（8）の英語の例では、後件が肯定的な内容（皆をだませる）でも文法的となる点が示されている。

（7）a. 雨が降っては、困る。（否定的内容）
　　b. 雨が降っては、出かけられない。（否定形式）
　　c．？雨が降っては、寝ていられる。（肯定文）
（8）Wearing that disguise, Bill would fool everybody.

助詞「は」が分詞に後続することにより条件の解釈が生じるのは、一般的な現象である。この点を、以下の（9）を見ながら考察しよう。そこでは、述部が動詞（=9a）、形容動詞（=9b）、形容詞（=9c）、名詞（=9d）の形式を持ち、助詞「は」が後続している。そのいずれの場合にも、主節に否定形式か否定的内容が含まれているので、「日本語の分詞構文で、後件の文に否定語や否定的な意味が生じる」というBrockettの指摘は、概ね正しいように思われる。

（9）a. 動詞
　　夜遅くまで起きていては、早起きできない。（否定形式）
　　そんなにお酒を飲んでは、身体に毒だ。（否定的内容）
　　b. 形容動詞
　　彼のようにまじめでは、出世できない。（否定形式）
　　バカでは、この問題を解くのが難しい。（否定的内容）
　　c．形容詞
　　そんなに汚くては、誰も買わない。（否定形式）
　　こんなに熱くては、すぐにのぼせる。（否定的内容）
　　d. 名詞
　　一万円札では、お釣りが出ない。（否定形式）
　　一万円札では、お店に迷惑がかかる。（否定的内容）

しかし、(10) の文に見るように、否定形式や否定的な含意がなくても「ては」や「ちゃ」が条件に解釈することが可能な場合があるので、さらに研究が必要である。

(10) a. そんなに褒められては、嬉しくなってしまう。
b. そんなに褒められちゃ、嬉しくなってしまうではないですか。
c. ？そんなに褒められては、嬉しくなる。
(11) 雨に降られてしまった。

ちなみに、(10) の文では、後件に「てしまう」がないと座りが悪い。この「てしまう」は、(11) のような被害受け身に典型的に見られる要素である。Kuroda（1979）によれば、日本語の被害受け身と中立受け身は、「〜によって」という要素をつけることが可能か否かによって判別が可能である。中立受身は、「〜によって」をつけることができるが、被害受身は「〜によって」をつけることができない。例えば、(12) の例を見られたい。

(12) a. ?雨によって降られた。（被害受け身＝「によって」と整合しない）
b. 太郎が花子によって批判された。（中立受け身＝「によって」と整合する）

そして、(13) に見るように、日本語の被害受け身文と中立受け身文の違いは、条件文においても働いているように思われる。

(13) a. そんなに偉い先生に褒められては、嬉しくなってしまう。
b. ？そんなに偉い先生によって褒められては、嬉しくなってしまう。

ここから、日本語の分詞が条件に解釈されるもう一つの要因として、「被害」という意味が関わっているのではないかと思われる。この点については、さらに研究が必要である。

次に、日本語における分詞の条件解釈に関する他の先行研究を見よう。Endo（1994）は、「は」が分詞につくと条件に解釈される事例と文の主語に

つく「は」の解釈の共通性に着目して、これらの関係を論じている。

（14）a. バカでは数学がわからない。
b. 象は鼻が長い。
c. All X are Y = if a is X, a is Y.

例えば、「象は鼻が長い」という文を見ると、「もし、ある動物（=a）がゾウ（=X）に属するなら、その動物（=a）の鼻は長い（=Y）」という関係を持つ。これと平行的に、「バカでは数学はわからない」という文では「もし、ある人（=a）がバカ（=X）のメンバーに属するなら、その人（=a）は、数学がわからない（=Y）」という関係が成り立つ。

これらの日本語の条件を表す分詞構文の先行研究に共通しているのは、分詞に「は」という助詞が新たに併合されると、条件解釈が可能となるという点である。この点を本稿が採用するカートグラフィー研究の視点から見ると、以下のようになる。前節で見たように、カートグラフィー研究では、文の統語構造において、ある意味を表す階層の主要部に特定の形態素が生じる場合、その階層を想定することが可能となる。そして、そのような形態素が、ある言語に見られる場合、Chomskyの統一性原理により、その階層が他の言語にも存在すると考える。本稿の事例では、形態素「は」が条件の階層の主要部となっており、それにより条件の意味が生み出されることになる。そして、この条件の階層は、すべての言語の文にあると想定される。

本稿では、この条件の階層を英語の分詞構文に適用する。前節で見たように、英語においては、述語の種類によって解釈の可能性が変わる。恒常的述語の場合は、理由の解釈となり、一時的述語の場合は、条件の解釈となるのが一般的な傾向のようである。例えば、（15a）のbeing the master of disguiseは恒常的な状態を表わしており、その解釈は理由である。一方、（15b）のwearing that disguiseは一時的な状態を表わしており、条件の解釈を持つ。

（15）a. Being the master of disguise, Bill would fool everyone.
b. Wearing that disguise, Bill would fool everyone.

しかし、日本語の分詞構文は、（16）に見るように、そこで表される事象が、一時的でも恒常的でも条件として解釈することが可能である。この点は、条件の解釈に、一時的と恒常的分詞の区別は無関係であるとするHigginbotham and Ramchandの主張とも相通じている。[4]

（16）a. 背がそんなに高くては、玄関に頭がぶつかってしまう。（恒常的）
　　b. そんなに飲んでは、体に毒だ。（一時的）

次に、日本語と英語の分詞構文の共通性を見よう。英語の分詞構文が条件に解釈されるためには、それが結びつく主節の助動詞が現在形では成立しない。まずは、英語の例を見よう。（17b）では、主節の助動詞がwillという現在時制の形式を持つと、非文法的な文となる。

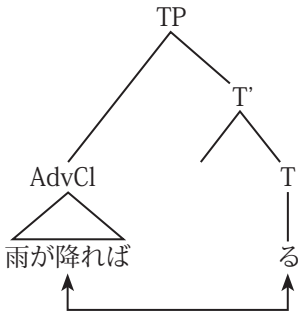
（17）a. Being the master of disguise, Bill would fool everyone.
　　b. *Being the master of disguise, Bill will fool everyone.

この主の副詞的な要素と主文との関係は、日本語において野田（1989）により、詳細に論じられている。野田によれば、日本語のすべての種類の副詞節は、主節の機能語と呼応する。例えば、条件を表す「ば」副詞節は、次の差に見るように、過去形とは呼応せず、非過去形と呼応する。

（18）a. 雨が降れば花火大会は順延する。
　　b. * 雨が降れば花火大会は順延した。

これを統語構造で表すと、次のようになる。

（19）



ここでは、副詞節（AdvCl）が主節のテンスの指定部に生じ、主節のテンスと副詞節の主要部の「ば」の間でテンスに関わる素性の照合（feature checking）が行われている。（英語では、While you（*will）talk to him you will be able to assess his state of mindの文に見るような時の副詞節と主節に呼応の関係が見られる。ポーランド語では、反実仮想（counterfactual）の副詞節にbyという形態素が生じることで主節との呼応が示される。英語については、Hornstein（1993）を、ポーランド語については、Endo and Haegeman（2016）をそれぞれ参照のこと）

日本語で条件に解釈される分詞構文においては、以下に見るように、分詞は主節のテンスと呼応する。（bの文は、条件でない解釈は可能である。ここで、*のしるしは、条件解釈としては成立しないという意味である点に注意されたい。）

（20）a. そんなに飲んでは、体に毒だ。
　　b. * そんなに飲んでは、体に毒だった。（* = 条件の解釈として）

次に、一見すると野田の主張の反例となる事例を見よう。野田によれば、「ずに」という否定の副詞節は、否定の要素とは呼応しない。（ここでも、問題にするのは、条件の解釈の可能性である。）

（21）a. よく見ずに買った。

b. * よく見ずに買わなかった。（*= 条件の解釈として）

しかし、この「ずに」副詞節に「は」が併合されると、文の文法性が向上する。（ここでは、上で見たように条件の解釈で後件に非過去形が求められることを考慮して、主節のテンスは非過去形にしてある。）

（22）よく見ずには買わない。

この文は、一見したところ野田の主張に対する反例となるように思われる。なぜなら、「ずに」副詞節は主文の肯定の要素と呼応する、という野田の主張に反して、（22）では、「ずに」副詞節に後続する主文に、「買わない」という否定の要素が生じているからである。しかし、本稿では、「は」が否定の副詞節に併合されることにより条件の階層が形成されると主張しているため、新たに形成された副詞節は条件タイプとなり、それはテンスと呼応することになる。つまり、（22）の野田に対する反例は、逆に野田の考えを支持していることになる。

（23）［［条件の階層［否定の階層…］る］

ここで、「ずには」は一語の条件の表現を表す形態素ではないかという異論が唱えられるかもしれない。この点は次のように、反駁できる。もしも「ずには」が条件を表す単体の表現であるならば、「ずには」副詞節は、「ならば」という別の条件文の主要部と同じ内部構造を持つことが期待される。つまり、「ずには」副詞節は「ならば」副詞節と同様に、節内にテンスを持つことができることが期待される。しかし、実際は以下に見るように、「ならば」副詞節はテンスをその内部に持てるのに対して、「ずには」副詞節は、その内部にテンスを持つことができない。

（24）a. 君が食べないならば、私も食べるのをやめよう。（「い」= テンス）
b. * 君が食べないずには、私も食べるのをやめよう。

つまり、「ずには」と「ずに」がその内部にテンスを持たないという同じ要素を持つことから、「ずには」は「ずに」副詞節に「は」が新たに併合されて作られることがわかる。[5]

以上、日本語の条件に解釈される分詞構文を見ながら、形態素「は」が条件のための統語的な階層の主要部となることを見た。

３．英語の分詞構文における条件解釈の制約の説明

以上、日本語において条件の意味解釈に関わる統語的な階層があることを見た。本節では、この点を念頭に置いて、Higginbotham and Ramchandにより提示された、「beingがあるとその分詞構文は条件に解釈できない」という一般化がどのように説明されるかを見る。そこで中核をなす事実は、次の文であった。

（25）（*Being）sick, John can’t play.

本稿では、分詞構文の統語構造として、Haegeman（2010, 2012）の副詞節の分析を採用する。Haegemanによれば、条件の副詞節にはその内部に、ムードタイプの副詞が生じることができない。

（26）a. *If frankly he's unable to cope, we'll have to replace him.（Speech act）
b. * If they luckily /fortunately arrived on time, we will be saved.（Evaluative）
c. *If George probably comes, the party will be a disaster.（Epistemic）
d. *If the students apparently can’t follow the discussion in the third chapter, we’ll do the second chapter.（Evidential）

日本語でも、条件解釈の場合、ムードタイプの副詞は、次に見るように難しいように思われる。

（27）a. 試験に（おそらく）落ちて、悲しんでいるのだろう。
b. 試験に（?? おそらく）落ちては、悲しまずにはいられない。
c. 試験に（残念なことに）落ちて、泣いているのだろう。

d. 試験に（?? 残念なことに）落ちては、泣かずにはいられない。

Haegemanは、条件の副詞節の内部では、可能世界の演算子（world operator）が移動するというBhatt and Pancheva（2006）やLyncan（2001）の分析を採用する。その分析では、副詞節の内部で可能世界の演算子（Op）が移動すると、その内部に生じる同じムードタイプの副詞を飛び越すことになり、その移動は相対最小性（relativized minimality, 以下RM）の原理に違反する。

（28）If…probably, fortunately…Op（＝ムードタイプの可能世界の演算子）…
ムードタイプの副詞
×

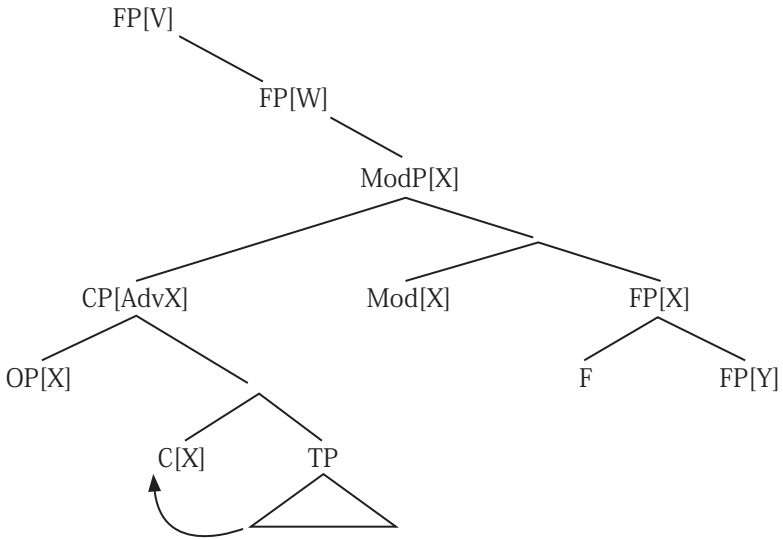
ここで、相対最小性とは、次の構造において、XとYの間に同じタイプの要素Zが介在する（intervene）場合に合法的な連鎖が形成されないという趣旨の原則である（Rizzi 2004）。合法的な連鎖が形成されないと、その派生はLFの完全解釈の原理（Full Interpretation）を満たせず、収束する派生とはならず、非文法性が生じる。

（29）…X…Z…Y…

ここでZが、XとYからなる連鎖に介在するのは、XとZがYをc-統御（c-command）するが、ZがXをc統御せず、XとZが同じタイプの素性のクラスに属する場合である。Rizziは、ムードの素性クラスの事例を詳しく論じていないが、Haegemanは、その点を掘り下げて議論しているのである。

本稿では、このHaegemanの副詞節の分析を適用したEndo and Haegeman（2015, 2016）の枠組みを採用する。そこでは、副詞節の内部に移動が生じる場合、その着地点は従属節句（Subordinate Phrase: SubP）であり、副詞節全体の範疇はChomsky（2013）のラベリング（labeling）という操作により決定される。本稿では、この副詞節の分析を分詞にも当てはめ、問題の分詞構文に、以下で述べるような派生を想定する。

（30）



まず英語では、助動詞のbeが文頭に移動することにより条件の解釈が生じる点に着目しよう。

（31）If you were sick,…=Were you sick, ….

ここでは、助動詞wereが文頭に主要部移動することにより、条件の意味が形成されている。副詞節の場合と同様に、このbe動詞の移動の着地点が、SubPであると考えよう。

（32）SubP　you <u>were</u> sick, …

分詞構文では、ifに相当する条件の階層は目に見えないが、日本語と同様に条件の階層が英語にも存在すると考える。より具体的には、英語の分詞構文では、この条件の階層の主要部が、非顕在的な if（=covert if）により占められると考える。

（33）［条件の階層非顕在的なif/日本語の「は」［…being sick…

助動詞wereは、文頭のSubPに移動して連鎖を形成するが、その連鎖には同じ主要部タイプの非顕在的なifが存在する。そのため、この移動は合法的な連鎖を形成できず、完全解釈の原理を満たせない。そのため、以下の例に見る非文法性が生じる。この理由により、助動詞のbeが分詞に生じると、条件の解釈が阻止されるのである。

（34）a. *Being the master of disguise, Bill would fool everyone.
（条件解釈として*）

b. ［SubP［ConditionalP covert if …［…being a master of disguise…

以上、Haegeman（2010, 2012）の副詞節の分析を分詞構文に適用する可能性を見た。ここで、本稿の分詞構文の分析の帰結を見よう。Haegemanの副詞節分析の特徴の一つは、副詞節の内部においてムードタイプの演算子が移動する点にある。この移動により、ムードタイプの副詞がその内部に生じると、相対最小性の原理により移動が阻止される。実は、この分析を支持する証拠が平安時代の分詞にある。近藤（2007）によれば、平安時代の日本語では、「て」形の分詞構文において、「のみ」「だに」「さえ」といった副助詞が分詞につくと、分詞の内部に、ムードタイプである評価の副詞が生じなくなる。例えば、以下の（35）に見る「て」形の分詞には、それに副助詞がつかない場合には、「まとこに」というムードタイプの評価の副詞が分詞に生じることが可能である。（近藤によれば、この「まことに」は、話者あるいは文章の筆者がその内容について「本当に」という判断を下す評価の副詞である。）そして、この「て」形の分詞に副助詞がつくと、この「まことに」という副詞が入る例が皆無となる。

（35）まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御いらへもしたまはず。（源氏・葵）

この点は, 次のように説明される。Miyagawa（2012）は、日本語における移動の引き金は、フォーカスなどの談話要素であるとした。この考えをもとに、

Endo（2012）は、副詞節にフォーカスの助詞がつくと、移動の特質を示すことを根拠にして、副詞節にフォーカスの助詞がつくと、その内部でムードタイプの演算子（Op）の移動が生じると主張した。この分析を分詞構文に適用すると、以下に見るように、分詞にフォーカスを表す副助詞がつくと、その内部でも演算子の移動が生じる。そして、その演算子の移動は、ムードタイプの副詞が介在すると相対最小性の原理によって演算詞の移動が阻止される。そのため、平安時代の分詞構文である「て」形において、フォーカスを表す副助詞「まことに」がその内部には生じなくなることが, 原理的に説明される。

（36）a. ［副詞節…　　Op…］

b. ［分詞構文　　Op…］

c. ［分詞構文　まことに　　Op…］
×

ちなみに、フォーカスには、強調を表す情報のフォーカス（information focus）と取り立てに関わる対比のフォーカス（identificational focus）の２種類がある（Kiss 1988）。近藤（2007）が指摘するように、平安時代における「て」形の分詞構文には、強調のフォーカスに相当する係助詞「ぞ」がついても、評価の副詞「まことに」は分詞構文の中に生じることが可能である（=38）。この事実は、現代の日本語においても、副詞節につく情報のフォーカスが移動の引き金にならない事実と一致している。つまり、情報のフォーカスは、対比のフォーカスとは異なり、副詞節内部でムードタイプの演算子の移動を引き起こさないので、副詞節の内部にムードタイプの評価の副詞が生じても、最相対小性の原理が違反されないのである。（副詞節におけるフォーカスの種類と介在効果については、Endo（2012）や遠藤（2015）を参照のこと。）

（37）まことにあけがたになりてぞ、宮帰りたまふ。（源氏・梅枝）

4．他の事例

本節では、前節で見た分析の帰結を考察する。まず、次のような時制を持つ英語の条件節を見よう。

（38）If I were a bird, I would fly.

この場合、非顕在的なifは条件の階層には生じない。なぜなら、顕在的なif（overt *if*）が条件の階層にあり、それがSubPの主要部に移動することで、従属節全体の条件文としての性質（labeling）が決定されるからである。

次に、先に見た助動詞が文頭に移動する事例を見よう。

（39）Were I a bird, I would fly.

この場合は、条件の階層にある顕在的なifは選択されずに、助動詞wereが、SubPの主要部の位置に移動すると考える。

（40）［SubP　［条件の階層　ϕ　［you were sick,…

なぜこの時制を持つ条件の階層には、分詞構文で生じたような非顕在的なifが、生じないのであろうか。前節で、非顕在的なifは日本語の条件節に生じる「は」と同じ性質を持つことを見た。日本語の「は」を用いた条件節も、次に見るように時制文には生じない。この事実をもとに、本稿では、非顕在的なifはそれと局所的な関係にある[-tense]の素性により認可されると考える。これは、英語のPROが［-tense］という非実現のテンス（unrealized tense）の素性により認可されるのと平行的である。

（41）a．雨が降れば、
　　b．雨が降るば

以上をまとめると、次のようになる。

（42）時制文（1）: SubP［条件の階層 ϕ　［I <u>were</u> a bird（例：Were I a bird）

時制文（2）　SubP［条件の階層　overt if［ I were a bird
（例：If I were a bird）

分詞構文　:　SubP［条件の階層　covert if［<u>being</u> sick［-tense］
（例文 : Being sick）

×　［-tense］により認可

次に、前節では議論されていなかったタイプの分詞構文を見よう。Higginbotham and Ramchandが主張するように、一時的述語と恒常的述語の区別が英語の分詞構文に無関係であるとするならば、beingが不在でありさえすれば、恒常的な述語でも条件の解釈が可能になるのであろうか。そこで、事実を整理しよう。まず、beingを持つ恒常的な意味を持つ述語の分詞は、次に見るように条件の解釈が不可能である。

（43）*Smart, John could pass the exam.

実は、この文は、独立した別の原則を破ることにより非文法的となる。それは、分詞構文においてbeingがない形容詞は、次に見る2次述語（secondary predicate）の形式となる点に関係する。

（44）Smart, John could pass the exam.

では、2次述語は、どのような原則に支配されているのであろうか。Rappaport（1991）によれば、2次述語を持つ文においては、2次述語も主文も共に一時的述語であることが要求される。

（45）a.　*John ate the meat <u>fool</u>.（fool=恒常的）
　　b.　*John knows French <u>drunk</u>.（know= 恒常的）

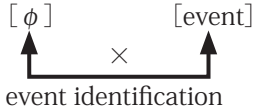
この点をRapaportは、次のように説明した。2次述語と主文の述語は、共に

事象項（event argument）を持ち、2次述語は、その事象項が主文の事象項と結び付けられる（event-identification）ことにより認可される。

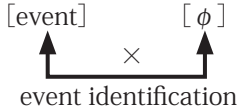
（46）John ate the meat raw/nude

恒常的な形容詞の述語は事象項を持たないので、２次述語としては認可されない。そのため、分詞がbeingを持たない恒常的な述語の文は、非文法性となる。

（47）a. *John knows French raw/nude.



b. *John ate the meat fool.



以上、beingがない分詞構文に恒常的な述語が用いられる場合、独立した原則（=event-identification）に違反するため、文そのものが成立しなくなる事を見た。

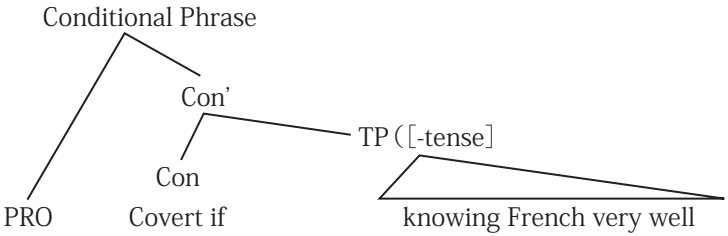
（48）Smart, John can pass the exam.

次に、分詞が、be動詞を持たない一般動詞の事例を見よう。次に見るように、恒常的な意味を持つ一般動詞が分詞構文に生じると、その文も条件には解釈されない。

（49）Knowing French very well, you could pass the exam of French I.

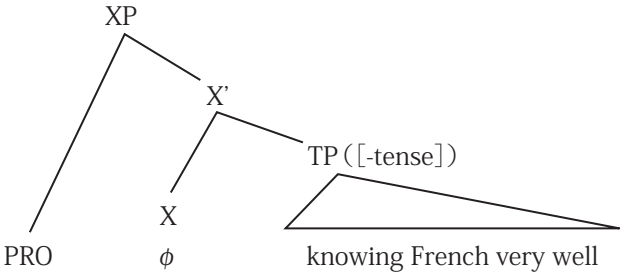
Kratzer（1995）が指摘するように、恒常的述語は、その投射（projection）の外側に主語を基底生成する。すると、上の分詞構文は、次の構造を持つ。

（50）



条件句（Conditional Phrase）の中で、その主要部の位置は、非顕在的なifによって占められる。しかし、そのifが占める位置は、述語の外側にある階層なので、同時にPROもそこに生じることになる。つまり、条件句が一種のCOMPであるとすると、以下の二重COMPフィルター（Doubly Filled COMP Filter）の違反が生じる。そのため、恒常的な意味を持つ一般動詞が分詞構文に生じると、条件には解釈されない。（二重COMPフィルターの最近の扱いについては、Radford（2014）やEndo（2015）を参照のこと。）

（51）二重COMPフィルター（Doubly Filled COMP Filter）
No overt complementiser can have an overtspecifier



次に一時的な意味を持つ一般動詞が分詞構文に生じる事例を見よう。前節で見たように、分詞構文においては、一般動詞が分詞になると条件の解釈が可能である。

（52）Wearing the disguise, Bill would fool everyone.

Wear（ing）という本動詞（main verb）は、助動詞とは異なり、英語では文頭に移動しない。そのため、それよりも上位にある条件の階層に非顕在的なifがあっても、それを飛び越さないので、相対最小性の違反は生じない。また、PROを外項としても持たないので、二重COMPフィルターの違反も生じない。その結果、本動詞を含む分詞構文においては、条件の階層が合法的に認可され、条件の解釈が可能になる。

（53）［条件の階層 covert if …［…wearing a disguise…

5．まとめ

以上、意味的に分析されてきた分詞構文の条件解釈の現象を統語的に分析した。そして、分詞構文にbeingが生じない理由を相対最小性の原理から導くことを示唆した。そこでは、Endo and Haegeman（2015、2016）の副詞節の分析を分詞構文に適用する可能性を模索した。その詳細な分析とその妥当性を検証する作業は、今後の研究課題である。

注

* 本稿の初期の原稿の一部について、岩本遠億教授、桒原和生教授、野田尚史教授およびLiliane Hageman教授からコメントをいただいた。ここに感謝の意を表したい。また、本稿の最新版については、Endo and Mizoguchi（2016）を参照のこと。

[1] 分詞構文を事態性の観点から見た研究としては、早瀬（2002）がある。

[2] Higginbotham and Ramchandは、助動詞haveも条件の解釈を阻止することを観察している。これは、後に見るBritish Englishのように、haveも主要部移動をすることを示唆している。

[3] 分詞構文において、助動詞haveやbeが条件の解釈を阻止する点については、Iwabe（1986）においても、述べられている。

[4] Carlson（1977）においては、一時的と恒常的との区別で総称文の解釈が異なるとしていたが、後のCarlson（1988）においては、一時的と恒常的との区別は総称文の意味解釈には無関係であると主張されている。

[5] 以上、副詞節に「は」という助詞が接続することにより、主文の要素との間に新たな呼応の関係が生じることを見たが、これと似た呼応の現象は、以下に見る平安時代の「て」形においても見られる。近藤（2007）によれば、本稿で動名詞としている「て」形に「こそ」

という係助詞がつくと，主文の動詞が終止形から已然形へと変化する。つまり，係助詞により新たな主節と呼応の関係が生じる。同様に,「て」形に「ぞ」という係助詞がつくと，主文の述語の連体形との間に新たな呼応の関係が生じる。これを本稿の枠組みで言えば，係助詞が分詞構文に新たな階層を形成し、それが主文の主要部と呼応していることになる。

（i）a. さすがにうひうひしくおぼえてこそ、訪れよらね.（源氏・東屋）

b. まことに明け方になりてぞ、宮帰りたまふ.（源氏・梅枝）

参考文献

Bhatt, Rajesh and RoumyanaPancheva. 2006. Conditionals. In Martin Everaert and Henk van Riemsdijk,eds., *The Blackwell Companion to Syntax*, vol 1, 638-687. Oxford: Blackwell.

Brockett A, Chris 1991. *Wa*-marking in Japanese and the Syntax and Semantics of Generic Sentences. Ph.D. dissertation, Cornel University.

Carlson, Gregory. 1977. A unified analysis of the English bare plural. *Linguistics and Philosophy* 1:3,pp. 413-58.

Carlson, Gregory. 1988. “The semantic composition of English generic sentences”. In G. Chierchia, B. Partee, and R. Turner（eds.）*Property Theory, Type Theory, and Semantics*, D.Reidel Publishing.

Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130:33-49.

Curme, George. 1931.*Syntax*. D. C. Heath and Company, Boston.

Endo, Yoshio. 1994. Stage/Individual-level nouns. *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 83-99.

Endo, Yoshio. 2012.The syntax discourse interface in adverbial clauses. In: *Main Clause Phenomena: New Horizons*, LobkeAelbrecht, LilianeHaegeman, Rachel Nye（eds）, 365-384. John Benjamins.

遠藤喜雄. 2015.「日本語研究の海外発信」『日本語研究とその可能性』222-247. 東京：開拓社

Endo, Yoshio and Liliane Haegeman. 2015. Adverbial concord merging adverbial clauses.*MIT Working Papers in Linguistics* 73, 25-44.

Endo, Yoshio and Liliane Haegeman. 2016. Adverbial clauses and adverbial concord. Paper presented at *Linguistic Variation in the Interaction between Internal and External Syntax*, held at University of Utrecht, the Netherlands and to be presented at the 9th edition of the

Days of Swiss Linguistics, Geneva, Switzerland.

Endo, Yoshio And Yuko Mizoguchi. 2016. A relativized minimality approach to free adjunct interpretations. Paper to be presented at the 9th edition of the Days of Swiss Linguistics, Geneva, Switzerland.

富士谷成章. 1977.『あゆひ抄』（竹岡正夫注）. 東京：勉誠社.

Haegeman, Liliane. 2010. The movement derivation of conditional clauses. *Linguistic Inquivy* 41：595-621.

Haegeman, Liliane. 2010. *Adverhial Clanses, Main Clause and Composition of the Left Peripheries.* Oxford: Oxford University Press.

Higginbotham, James and Gillian, Ramchand（1997）The stage-level/individual-level distinction and the mapping hypothesis. In David Willis, ed., Oxford University Working Papers in Linguistics, 3–83, Oxford, UK: Centre for Linguistics and Philology.

早瀬尚子. 2002.『英語構文のカテゴリー』東京: 勁草書房.

Hornstein, Norbert. 1993. *As Time Boes by*. Cambridge, Mass.: MIT Press（1990）, paperback edition 1993.

Iwabe, Kozo. 1986. “Semantic interpretation of free adjunct constructions.” *Tsukuba English Studies* 5, 1-13.

Jespersen, Otto. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, 7 vols., Geroge Allen & Urwin, London.

Kiss, Katakine. 1998. Identificational focus versus information focus. *Language* 74:2, 245-273.

近藤泰弘. 2007.「平安時代の接続助詞「て」の機能」『国学院雑誌』第108巻11号. 174-183.

Kratzer, Angelika. 1995. Stage level and individual level predicates. In The Generic Book.

Kruisinga, G. 1932. *A Handbook of Present-Day English*, 4 vols., Noordhoff, Groningen.

Kuroda, Shige-Yuki. 1979. “On Japanese passives.” In George Bedell et. al. eds. *Explorations in Linguistics.* Tokyo: kenkyusha.

Lycan, William G. 2001. “The syntax of conditional sentences.” In *Real Cnditionals*, chapter 1, 1-15. Oxford:Clarendon Press.

Miyagawa, Shigeru. 2010. *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-based and Discourse Configurational Languages.* MIT Press, Cambridge, MA.

野田尚史. 1989.「文構成」『講座　日本語と日本語教育』第1巻, 67-95. 東京：明治書院.

中田祝夫・竹岡正夫. 1960.『あゆひ抄新注』東京：風間書房.

Radford, Andres. 2014. How come questions with *how come* and different. Ms. University of Essex.

Rapoport, Tova.R.1991. Adjunct predicatesand the individual/stagelevel distinction. In: P. Spaelti& E. Duncan eds. Perspectives on Phrase structure: Heads and licensing. New York: Academic Press.

Stump, Gregory. 1985. *The semantic variability of absolute construction.* Dordrecht: Foris.

竹岡正夫. 1961.『富士谷成章全集』東京：風間書房.

Tsujimura, Natsuko. 1992a. “Adjuncts and event argument in restructuring” Japanese/Korean Linguistics Conference, San Diego State University, August 14-16.

Tsujimura, Natsuko. 1992b. “Restructuring and event argument in Japanese” Linguistic Society of America, Annual Meeting, January 9-12.

遠藤喜雄
神田外語大学大学院言語科学研究科教授
endoling@gmail.com

溝口裕子
神田外語大学大学院言語科学研究科博士前期課程
5151203@kuis.ac.jp